

*The Princess Casamassima*の結末

—民主主義のアポリアと「来たるべき民主主義」—

松 浦 恵 美*

The Ending of *The Princess Casamassima*: The Aporia of Democracy and “Democracy to Come”

MATSUURA Megumi

Abstract

The political aspect of *The Princess Casamassima* has been largely ignored for years due to its deviation from the main plot concerning terrorism in 19th century London and its melodramatic ending. What is crucial, however, for the characters' decisions in this text is their political orientations, especially their attitudes toward democracy. While Paul Muniment, a thoroughly rational modernist character, is firmly convinced of the advent of modern democracy, the protagonist Hyacinth Robinson, suspecting the ethical legitimacy of democracy and its destructive nature, turns back to the aristocratic ideology. His doubt, which would reflect the author's own, resonates with the insight of French political thinker Alexis de Tocqueville who explored the effect of democracy in America and predicted an inevitable but dubious future of democracy. On the other hand, the Princess Casamassima's enthusiasm for revolution foregrounds the problem of modern democracy which excludes women from the political arena. As French philosopher Jacques Derrida claims in his later work, the aporia of democracy concerning hospitality to others is the vital problem of “democracy to come”. In this article I examine how this text questions the fundamental aporia in democracy and foreshadows the next democracy after the modern period.

Keywords : democracy to come, terrorism, modernity, aristocracy and democracy, politics of women, hospitality to others

序

*The Princess Casamassima*の結末で、主人公ハイアシンス・ロビンソンは遂に自身が属するロンドンの地下組織から貴族暗殺の指令を受け取る。しかし、革命の意義を問い直しながら、自分の居場所を求めてロンドンを彷徨った末、彼はその指令を実行せずに、渡された銃で自らを撃ち抜く。1886年に出版され、ヘンリー・ジェイムズの作品としては珍しくテロリズムという政治的な主題を扱う *The Princess Casamassima*であるが、実際にこのテキストにおいてテロは実行されない。ハイアシンスは一人命を絶ち、カサマシマ公爵夫人が彼の亡骸に覆いかぶさり嗚咽を漏らすところで、この小説は終わりを迎える。

*The Bostonians*と並んで中期の代表作であるこの作品は、発表当時から厳しい評価にさらされ、その後も批評

キーワード：来たるべきデモクラシー、テロリズム、モダニティ、貴族制と民主制、女性の政治 他者の歓待

*平成22年度生 比較社会文化学専攻

において取り上げられない時期が続いた。それは主に、政治的主題を扱ったはずのこのテキストが、結末に向けて政治性から離れていってしまったと捉えられたためであった。Rebecca Westは、この作品が、たとえば一時代前のゴシック小説にあるような暗く大仰なメロドラマ的プロットを蘇らせていることを批判している(73)。実際、冒頭で取り上げたこの作品の最後の場面は、テロリズムを主題とした政治的小説というより、むしろ主人公の悲劇的な死とそれを嘆く女という伝統的なメロドラマの構図を繰り返していると指摘できるだろう。しかし、結末においてハイアシンスと公爵夫人(以下「プリンセス」。「公爵夫人」と同意)が政治的な主題から引き離されていくその理由を問うことは、今まであまりされてこなかった。彼らの政治からの遊離がどのような時代的地理的条件の中で、そしてどのような要因によって起こったのかを吟味し、それにより彼らが置かれた政治的地位を精査することが必要であると考えられる。

本稿では、*The Princess Casamassima*における政治性を、近代民主主義の性質とその限界に迫りながら、それとの関係において考察していくことを目標とする。第一節では、ポール・ミュニメントとハイアシンスという二人の登場人物がそれぞれどのように民主主義を捉えているかを比較することを通じて、近代民主主義の実像について考察を行う。続いて第二節では、フランスの政治思想家アレクシ・ド・トクヴィルの著作を参照しつつ、ジェイムズ自身の民主主義観の変化を追う。最後に第三節では、プリンセスの表象を通じて提起されている女性の政治参加という問題を、近代以降の民主主義の可能性を包摂するものとして分析する。ジェイムズの記述は、当時の歴史的社会的状況を鋭敏に反映しつつ、さらにその流れの先に生起する政治体制をテキスト上において先取している。さらには、その後20世紀から21世紀にかけて世界を覆うに至る民主主義の拡大的傾向とそこに内在する危険までも描き出している。よって本稿では、19世紀前半から21世紀の現在に至るまでの民主主義に関する言説を参照しつつ、このテキストに表れている民主主義とそれに対する不安を読み解き、さらにこのテキストが21世紀の現在まで続く民主主義の未来をどのように照射しているのかを論じる。

1. 近代民主主義の確かなる到来—ポール・ミュニメントとハイアシンス

このテキストで民主主義を標榜しているのは、主人公のハイアシンスではなく、ハイアシンスの友人で彼が強く慕うポール・ミュニメントである。一介の労働者であるミュニメントは、その聡明さと明確な合理性、そして冷静かつ堂々とした振る舞いから、皆の尊敬を集め、組織の中核に近い位置を占めている。立派な体躯と強靱な理性という男性的な資質を備えたミュニメントに対し、ハイアシンスはホモソーシャルな憧れを抱き、彼との友情が、ハイアシンスが革命を信奉する理由の重要な一部となっている。しかしその一方で、ミュニメントは「革命」を信じず、また「民衆」を嫌悪している。ハイアシンスに、この活動にどんな「意義」があると考えているのかと聞かれて、ミュニメントはこう答える。

“... I believe, and you pretend to believe, though I am not sure you do, in the advent of the democracy. It [the scheme] will help the democracy to get possession that the classes that keep them down shall be admonished from time to time that they have a very definite and very determined intention of doing so.” (*Casamassima*, 444)

ここでいささか唐突に、ミュニメントは民主主義への信頼を口にする。しかし、ミュニメントが信じると言及する「民主主義」とはどのような性質のものであろうか。

それを考えるにはまず、近代民主主義の成立の過程と、19世紀後半の民主主義を巡る政治的社会的状況を理解する必要がある。そもそも、「民主主義」とは歴史上大きな変化を遂げていった言葉であり、その意味するところは時代により大きく異なる。古代ギリシアにおけるデモクラシーは、「デモス=民衆」の「クラトス=権力」を意味し、そこでは成人男性市民による直接民主制が行われていた。しかし、封建制を経て成立した近代民主主義においては、人民が王や貴族に代わる政治的主権の担い手とされつつも、制度としては代議制民主主義が取られ、民衆の直接的な政治参加は制限された。また、「デモクラシー」という概念がどのように捉えられてきたかについても注意が必要である。古代より民衆は無知や教養のなさ結び付けて軽蔑的に捉えられ、そのような民衆による統治はしばしば嫌悪や恐怖を持って受け取られた。民主主義に対するこのような見方は、近代民主主義の発展期においても根強く残っていた。イギリスにおける議会政治の確立やフランス革命などを経て、政治と社

会の民主化が進行する一方で、「無知で教養のない」民衆が政治的実権を握ることに対する不安と嫌悪は、特に社会の上層階級の中で強く存在した。19世紀のイギリスにおいても、民主主義に対する反発の念は根強いものであった。1867年の選挙法改正により一部の熟練労働者にも選挙権が与えられはしたが、政治家たちは完全普通選挙の達成には否定的であった。むしろ、民衆がさらに政治的権利を得ることで、政治家が民衆に迎合して政治を行うようになり、その結果政治が墮落するのではという危惧の念があった（クリック、124-32）。このように、この時代のイギリスにおける民主主義は既存の政治体制に対する脅威として捉えられており、不安と疑念の対象であったのである。

このような歴史的背景と照らし合わせると、革命運動の中核にあるポールが民主主義への信頼を示すのは理解に難くない。彼の思想は、近代における新しい民主主義の理念を正確に反映したものであるといえる。彼の示す理性的な態度と繰り返し強調される確固とした男性性は、近代的主体の理想を模範的に提示している。また、その彼が民衆自体を嫌悪する一方で同時に民主主義を選択することは、人道的理由に覆われて不可視となりがちな民主主義の政治的合理性を仮借なく明らかにしているといえよう。前述の場面において、ハイアシンスは「平等」という観念の持つ意義をポールに問う。「平等」は、彼ら地下組織が民衆の権利を求める上で基盤となる思想である。しかし、この「平等」の理念は、そのすぐ後ろに政治的な有用性を伴う。「平等」の観念に基づいて民衆に主権を与える近代民主主義は、それにより人道的な正当性を得る。しかし、民衆はむしろ王や貴族といった少数者に代わる権力の割当先であり、また古代ギリシアと違い代議制民主主義が取られる近代においては、民衆自身が権力を担っているかどうかはより疑わしい。このように、民衆に主権が与えられることには、人道的な理由よりむしろ政治的な必然性がある。ポールの「彼ら（民衆）を試してみたいんだ」、「今のやり方ではだめだ。うまくはいかないよ」（444-5）という言葉は、「平等」が持つ人道的理由の裏側にある近代民主主義の政治的・合理的判断に基づいた革命の蓋然性を説明している。貴族のような支配階級に代わって人民が主権を持つというのは、進歩的歴史史観に基づく社会実験でもあり、それを担うのが「健康的な視界の単一性」を持ち、「民衆の精神の立派な見本」（446）であるミュニメントなのだ。

このように、イギリス人労働者階級のミュニメントが民主主義の到来を堅実に受け入れる一方で、イギリス人貴族とフランス平民の母を出自とするハイアシンスは、全く逆の方向へと向かっていく。ハイアシンスは当初革命にのめりこみ、自ら暗殺計画の実行役となることを志願する。しかしプリンセスを通して貴族階級の作り出した絢爛豪華な文化に触れ、それに魅了されたハイアシンスは、いつしか組織に、そして革命とそれが目指す民主主義の達成自体に疑問を抱くようになる。友人のポールを敬愛し、強い憧れを抱きつつも、ハイアシンスの考えは決定的にポールから、そして組織から離れていく。ハイアシンスにとって、民主主義は変化、それも無慈悲で破壊的な、かつ止めようのない変化である。

What was most in Hyacinth's mind was the idea, of which every pulsation of the general life of his time was a syllable, that the flood of democracy was rising over the world; that it would sweep all the traditions of the past before it; that, whatever it might fail to bring, it would at least carry in its bosom a magnificent energy; and that it might be trusted to look after its own. When democracy should have its way everywhere, it would be its fault (whose else?) if want and suffering and crime should continue to be ingredients of the human lot. (478)

ミュニメントが合理的に民主主義の到来を確信し、自身の政治的判断を一貫して保持するのは対照的に、ハイアシンスは民主主義が過去に対して、そして未来において何をなすのかを考え、その破壊的な側面と荒涼とした未来に考えを巡らせることとなる。

彼の思想的転換の契機となったのは、彼が育ての親であるピニーの遺産でパリとヴェネツィアを訪れ、そこで絢爛たる文化に触れたことである。パリでフランス革命のエネルギーを感じ、それに心を打たれながらも、ハイアシンスはそのような革命の下には「嫉妬」、つまり自分より富める者へのルサンチマンがあるのではないかと考えるようになる。それはまた、彼の「再分配」に対する疑念へと繋がっていく。革命運動の中心人物であり、テキスト上には姿を現さないが常にその思想的背景とし物語中に偏在するホッフェンダールは、ここでは文化に対する仮想上の敵対者として糾弾される。ハイアシンスは、ホッフェンダールが「ヴェロネーゼの天井画を細く引き裂いて、みんながその小さな一片を持つことができるようにするだろう」（396-7）と想像し、そのような行

動原理を唾棄する。一方で、「幸福な少数者」による「偉大なる蓄積」(445)に、それが大勢の不幸の上に成り立っていることを理解しつつ、心を打たれる。そうして彼は「平等」を求める動きへの不信を強めていく。この「平等」への不信が、彼の民主主義への不信の根本にある。「不平等、不平等、…僕はもうなぜかその言葉にそんなに動かされなくなったんだ」(444-5)というハイアシンスの言葉は、民主主義の根底をなすものに対する問いでもある。こうして彼は民主主義から離れて、貴族的見方へと傾倒していく。

2. アメリカの民主主義—トクヴィルとジェイムズ

ハイアシンスの民主主義観は、この時期のジェイムズ自身の民主主義に対する考えを考察する上で重要なものである。太平洋の兩岸で教育を受け、コスモポリタンとして生きることを選択したジェイムズであるが、アメリカ人である彼にとって民主主義は祖国の政治的思想的基盤であり、そのため民主主義への言及は彼の著作の中に度々現れている。

ジェイムズの前期のテキストでは、民主主義という概念は常にアメリカとの関係において、あるいはアメリカを象徴するものとして用いられている。例えば、*The American*の主人公クリストファー・ニューマンは「民主主義の薫り」(227)を放つとされるし、*The Portrait of a Lady*のイザベル・アーチャーは、友人で女性記者のミス・スタックポールを、「偉大なる民主主義の、(アメリカ)大陸の、国家の、国民の放射物」(112)であると評する。このような文脈では、「民主主義」は真新しい未知の新世界アメリカを言い換える言葉として使われている。また同時に、このようにアメリカを象徴するシニフィアンとして使われる「民主主義」は、一義的で自己言及的なものとして現れている。なぜなら、民主主義を建国の理念として成立したアメリカは、旧体制の打破の後に民主主義を迎えようとしていたヨーロッパと違って、民主主義以外の歴史も、政治体制も、そして思想的基盤も持っておらず、よって民主主義とアメリカはほぼ一体をなすためである。そのため、これらのテキストにおいて民主主義はアメリカの同義語として現れており、アメリカ人登場人物たちを形容する際にほとんど同語反復的に使われている。ⁱ

それに対し、中期の長編作品においては、民主主義はより多様な意味合いを含むものとなっている。それは、地域間における民主主義への態度の差異がより精緻に投射されているためだといえよう。その結果、民主主義はより多角的に、そして批判的に扱われている。例えば*The Bostonians*では、ボストンにおける女性運動を通してリベラルな北部と封建的な南部の思想的対立が描かれているが、ここでは民主主義は北部のフェミニストたち、特に公民権運動に人生を捧げたミス・バーズアイや、人民のために情熱的な演説を行うときのヴェレナ・タラントに対する形容詞として使われている。それとは対照的なのが、ヴェレナを手に入れようとする南部出身のバジル・ランサムである。彼はトマス・カーライルを信奉し、封建的な価値観を保持するとともに、「現代の民主主義という侵略」(184)に対して鋭い疑いの目を向ける。このように、*The Bostonians*においては、民主主義は一義的な指示語ではなく、複数の立場による議論の対象として姿を現している。続いて発表された*The Princess Casamassima*では、民主主義自体の光と影の二面性が十分に表わされている。ヨーロッパに押し寄せる新しい波として描かれる民主主義は、ここではミュニメントを通して新時代の可能性を告げるものとして、そしてハイアシンスを通して不安と破壊の兆候として、暴力的なイメージを伴いつつ再提示されている。

ジェイムズと同様に、ヨーロッパとアメリカを交差させることで民主主義を論じた人物として、アレクシ・ド・トクヴィルが挙げられよう。近代民主主義を理解するための古典と言われる「アメリカの民主主義」を書いたトクヴィルは、ヨーロッパの視点からアメリカを透徹した目で観察し、この新しい国の独特な政治体制と社会を記録した。

トクヴィルは1805年、貴族の家系に連なる父親と母親のもとに生まれる。フランス革命後の恐怖と混乱の時代に、反革命分子と見なされながら辛くも生き延びた両親の下に育ちながらも、トクヴィル自身は七月革命後の新政府のもとに共和制を受け入れ、政治家としての経歴をスタートさせる。こうして、トクヴィルは貴族制から民主制への移行を、時代の上でも自身の人生の上でも経験することとなる。政治家となった翌年の1831年、トクヴィルは監獄制度の調査研究のためにアメリカを訪れ、1年間に渡り滞在する。この滞在から得た知識とそこから生まれた思索をまとめたのが、1835年に第1巻が刊行された「アメリカの民主主義」である。

この書物の中でトクヴィルがアメリカの民主主義の中心にあると考えたのが、「平等」の理念である。トクヴィルは、アメリカの活気に満ちた民主主義体制の根本には、人々が抱く「諸条件の平等」という理念があると考えた。封建制を経験することなく成立したアメリカでは、建国時から人民の間に理念上の平等が存在した。このような理念的平等、トクヴィルが呼ぶところの「想像上の平等」は、人々を現実においても平等が達成されることを求めて奔走させる。それにより、アメリカは政治においても経済活動や生活においても活力に満ちた国になっているのである。しかしこの想像上の平等のために、人々は現実において他人が自分より特権を得ていることに耐えきれぬ思いを抱くようになる。こうして、「想像上の平等」への愛着のもとに、不平等への憎悪というべきものが生まれる。この憎悪はまた、ヨーロッパにおいて貴族制から民主制への移行を進めた原動力でもある。そもそも封建制社会においては、階級ごとに人々の間に差異があること、貴族が平民にはない特権や財産を所有することは、自明のことであった。そのため、人々は階級に基づくどんな不平等にも不満を抱くことはなかった。しかしいったん人間の平等が理念として示され、さらに貴族と新しく経済的実権を強めた中産階級の間の実質上の差が小さくなっていくと、人々はもはや現実にある不平等に耐えられなくなる。こうして、平等の可能性によって掻き立てられた不平等への不満が、ヨーロッパで起こった市民革命の原因であるとトクヴィルは分析する。このような不平等への憎悪、そして特権階級への嫉妬は、その後19世紀のヨーロッパ各国で続いた暗殺事件やテロリズムの根底に存在していたといえる。それはまた、ハイアシンスが「平等」という理念に疑問を抱き、そしてその下にある「嫉妬」に気づいたときに感じ取ったものであり、さらにホッフェンダールが象徴する貴族階級の文化の破壊と人民への「再分配」を動機づけるものなのである。

トクヴィルはまた、平等が生む害悪についてさらに詳しく論じている。その最たるものが、人々の孤立、そして専制の危険性である。民主制の下では、政治的決断は多数者の声によってなされるため、多数者には政治的全能が付与されることとなる。しかし、平等の下で起こるそのような全能性は、一方で人々から思考を奪い、彼らの精神的活力を弱めることに繋がっていくとトクヴィルは考える。その結果起こるのが、「多数による専制」(Ⅱ上、33)である。この新しい専制は、その権力の源を人民というより公平な基盤におくため、旧体制における独裁よりずっと強固な倫理的後ろ盾を持つ。そのために、それは「より完全な独裁」という以前よりさらに恐ろしい専制形態となりうる。また、民主制における特殊な思考である「個人主義」により、もはや階級に属さない人々は自分の周りの人々に対する共感や関心を抱かなくなり、孤立したばらばらな存在となる。こうして、平等になった世界で人々は拡散し、かつ連続性を喪失する。貴族制の社会においては、人々は「下は農民から上は国王に至る一つの長い鎖」で繋がれていたが、民主制は「その鎖を壊し、環を一つ一つばらばらにする」(177)。このばらばらになった個を、「巨大な後見的権力」(Ⅱ下、256)が保証する。その庇護の下で、人々は無力に不毛に動き回る。「専制はだから民主的な世紀には特別恐るべきもののように思われる」(263)というのが、トクヴィルが民主主義の行く末を思索した末に辿り着いたヴィジョンである。ⁱⁱただし、トクヴィルは繰り返すのだが、貴族制から民主制への移行は必然かつ不可避のものであり、決して貴族制に回帰することはあり得ない。また、貴族制においては階級による覆しえない不平等とそれに起因する暴力が存在していたのであり、それと比較するなら民主制は「より正義に適」(280)うものとなる可能性を持った体制でもある。その上で、トクヴィルは、到来する民主主義の時代において、その危険性に抵抗するために、貴族制の要素を部分的に導入し持続させることが必要であると考え。貴族制の要素とは、ばらばらになっていく個人の間に繋がりを打ち立て、同時に権力に抵抗する独自の思考を持てるような方策である。ⁱⁱⁱそれにより、民主制における専制という脅威に抵抗しようと、トクヴィルは主張する。この書物において、トクヴィルは決して民主制を否定したり、それを回避したりしようとはしていない。しかし、民主制の未来に、旧体制においてはありえなかったような大きな危険、それも人間性そのものを脅かすような危険を見てとっている。また、そのような危険を前にして、貴族制を懐かしむ気持ち、「失われた社会を惜しむ気持ち」(279)も抱く。だからこそ、旧世界の貴族的な要素を、新しい時代が孕む危機に対処するために有効に使うことを提示しているのである。とはいえ、19世紀のヨーロッパに押し寄せようとしていた民主主義に対して、トクヴィルが思索の末見出したのは、あまりに危険な未来の姿であったといえよう。そして、この危険で貴族制よりはるかに息苦しい未来は、ハイアシンスが感知した民主主義の中での悲慘と共鳴するものである。民主主義に対して、トクヴィルとは逆にアメリカからヨーロッパを訪れ、そこから逆照射する形であらためて民主主義を捉えたジェイムズは、アメリカという個別的状況から離れた民主主義それ自体の

実像をこのテキストの内に反映させている。ハイアシンスの民主主義から貴族制への回帰と、結末の孤独な死は、迫りくる民主主義の波に対しジェームズが背を向け、それを拒絶することを選んだようにも感じられる。

3. 近代民主主義を超えて—プリンセスと「来たるべき民主主義」

ボールの確信、ハイアシンスの絶望、そしてトクヴィルの「懸念と期待」—19世紀ヨーロッパにおいて、来たるべき新しい政治体制に対し、このような多様で緊張と矛盾に満ちた反応が存在した。この混乱した、ある種の閉塞感を伴う時代状況のなかで、ハイアシンスの自殺に象徴される民主主義のアポリアは、解決不可能なもののように思われる。しかしまた、ここで確認しておかなければならないのは、ハイアシンスが背を向けたのは「近代」における民主主義であることだ。つまり、それはあくまで近代思想の上に成立したもののなのである。ここで改めて、近代民主主義の基盤となった近代思想とその限界について、そして近代の先の民主主義について考えてみたい。

近代民主主義へと繋がる数々の市民革命の後ろ盾となったのが、この時代のヨーロッパにおいて目覚ましい発展を遂げた啓蒙思想である。この思想により、それ以前の神学に基づいた世界観から解放された、人間中心の価値体系が成立した。トクヴィルが特に重要なものと考えた「平等」の観念は、この人文的価値体系のもっとも中心的なもののひとつである。しかしこの「人間」、「平等」といった思想は、実際には成人男性市民のみに限られたものであり、そのため近代民主主義においては女性や非白人人種は政治的領域から排除されている。たとえばトクヴィルの著作においても、女性や非白人については別項が設けられ、「市民」とは別の扱いがされている。近代における女性と政治について、Carole Patemanは、近代の民主主義における社会契約は「兄弟間の社会契約」、つまり男性のみの間に結ばれる契約であり、それが締結される背景には女性の政治的権利の抑圧があることを指摘している（119）。歴史的な政治状況を振り返っても、普通選挙権が女性に与えられたのはアメリカで1920年、イギリスでは1928年で、男性労働者の選挙権獲得から半世紀以上を経てのことである。このように、近代民主主義は一方で人民の平等を唱えつつ、もう一方で明らかに排除と疎外の論理を行使しているのである。

女性の政治的権利という問題は、*The Princess Casamassima*において、プリンセスの革命への情熱をめぐって展開されている。プリンセスは、イタリアの公爵と不幸な結婚をした後別居に至り、今はロンドンの屋敷に暮らしつつ、「民衆」を知り彼らと交流を持つことを望んでいる。プリンセスの政治への参入は、彼女がハイアシンスと出会うところから始まる。ハイアシンスとの交流を通じて彼女は革命への情熱を強めていくのだが、それにより二人は「見慣れぬ親密圏」（竹村、19）、つまり、近代ヨーロッパが要求するような家父長制や異性愛制度に基づいた家族制度とは別の関係を作り出す。この時、彼らは近代の言説の外にある新しい言説の可能性を示しているといえる。しかし、彼らの新しい親密圏は長くは続かない。それは、彼らがともに近代の規定する存在様式から逸脱しているものの、二人の抱く政治的思想的ヴィジョンは近代を挟んで全く別の方向へと向かっているためである。前述の通り、ハイアシンスはプリンセスが捨てようとしている貴族階級の文化に魅了され、革命や平等という理念から離脱して貴族制という前近代的な理想に回帰していく。一方でプリンセスは、平等という近代民主主義の理想を、そして女性の政治参加という近代においては想定されていない権利をも、さらに加速しながら追い求めるのである。

プリンセスという人物をどう解釈するかについては、批評においても意見が分かれている。その分岐点は、彼女において交差する政治とジェンダーという二つの問題をどう解釈するかにあるといえよう。Jeffory A. Clymerは、プリンセスの解釈が「懲罰的な論調と同情的ではあるが困惑した筆致」の間で揺れ続けてきたと指摘している（232-3）。前者の場合、プリンセスはファム・ファタールあるいはサロメといった男を破滅させる女として捉えられるか、または自己に対する激しい嫌悪のために革命の理想に走ったと見なされる。Clymer自身は、プリンセスの表象について、ジェームズは革命的な女性を描くのにジェンダーや階級に依る動機を探るという不適当なナラティブを採用し、その結果政治的暴力というプロットから離れてしまい、同時にナラティブはプリンセスという革命的要素を孕んだ人物を罰することとなったと論じている（75）。この分析においては、Clymerは政治的問題とジェンダーや階級といったより個人に属する問題を別個のものと捉え、プリンセスの表象におけるそれらの要素の混淆を否定的に解釈している。またClymerは、プリンセスの“… but I am only trying to

be natural.” (466)という言葉について、ジェイムズは結末でプリンセスに泣き崩れる女という「女性の典型的な姿」を与えることで、彼女を彼女が望むのとは別の形で「自然化している」と述べている (99)。しかし、政治—公的問題系とジェンダー—私的問題系を分断し、さらに女性に理性ではなく感情を担う役割を与えるという近代における価値体系それ自体を疑問視するということはなされていない。一方で、プリンセスが囚われている人種的前提に注目するSara Blairは、上記のプリンセスの発言について、「アングロ＝アメリカ文化の劇場化した公的アリーナで見世物となっている女性たちにとって、『自然』で『ある』とかそう振る舞うということは一体何を意味するだろうか」と問う (118)。このように、プリンセスの政治的動機と、それに対する疑念と拒絶を読む上では、彼女がどのような社会状況の中に、そしてどのような価値体系の内に置かれているのかを問うことが必要となる。それはまた、政治的問題と私的問題、公的領域と私的領域を二項対立化させた近代の思想を問い直すことでもある。

それでは、プリンセスの政治性はどのように受容されるべきなのか。そもそも、女性のように近代民主主義の原理において排除されている存在が、受容されるということがありうるのだろうか。プリンセスは、地下組織の男性たちにとっては、排除の対象であると同時に脅威でもある。革命と平等への情熱に燃え、また周囲の人間皆を魅了する圧倒的な美しさを持った彼女は、理性の重視や男性中心主義によって成り立つ近代的主体を脅かす存在である。現に、そのような近代的主体の見本であるミュニメントは、プリンセスと交流を持ち、彼女に半ば魅了されつつも利用しようとする過程で、むしろ彼自身が組織の中での地位と信用を失っていく。それは、ハイアシンズに暗殺の指令を伝える役割が、彼ではなく実直なドイツ人労働者のシンケルに託されたことで明らかとなる。こうしてプリンセスは、主体に対する他者の根源的な危険性を提示した上で、その他者を受け入れることの是非という問題を突きつける。彼女の問いかけはまた、民主主義にとって他者を受け入れることは可能なのかという根本的問題へと繋がっていく。

冷戦終結以降の21世紀の現在において、民主主義は世界中を覆ったかのように見える。それにより、民主主義の達成あるいは勝利を謳う向きもある。しかし、現代においては、むしろ近代以降の時代における民主主義のあり方とその存続可能性が疑問視されるようになってきているといえる。近代民主主義はそもそも主権国家という形態に依存しており、主体、主権という統一的像を確立し、それを国民国家とナショナリズムのもとにまとめることで成立した。しかし、主に経済活動を通じて、国境を越えて人ものが行き来するグローバリゼーション、また少数民族のアイデンティティーの承認や移民の問題など、国民国家という枠組みそのものを揺るがすような新しい事態が出現している。その中で、自分たちと異質な他者とどう向き合っていくのかが、これからの民主主義の至上命題となる。

これからの民主主義について考える上で重要となる概念のひとつが、ジャック・デリダが示した「来たるべき民主主義」であろう。デリダ晩年の書「ならず者たち」では、民主主義の公理および「来たるべき民主主義」についての思索が展開される。デリダは、民主主義の根幹のひとつとして「歓待」、つまり何の留保もなく他者を招き入れ歓迎することをあげている。民主主義がデモス＝民衆の政治である限りにおいて、民主政体は理念上においては誰をも排除することなくすべてのものに開かれてあるべきである。しかし、すべての政治体制がそうであるように、他者、つまり自分たちとは異質なものの、「市民、兄弟、同類」(129)ではない者を受け入れることは、自らを限りない危険に曝すことでもある。つまり民主主義は、一方では主体、自律性といった自己同定的なものによって成り立ちつつ、もう一方ではそれと両立不可能な、他者、他律性、異質なものを求めるのである (43)。このために、民主主義はある不可能なもの、ルソーが言うところの「かつて存在したことがなかったし、これからも決して存在しない」ものという様相を帯びる。しかしここでデリダは、この民主主義のアポリア、「現前＝不可能性」(149)を、だからこそある「必要および義務」へと、民主政体があらねばならない、あるべきであるという要請の生起へと繋ぎ合わせる。「来たるべき民主主義」の中にある「自己批判の権利、あるいは改善可能性への権利と呼ばれるあの自己免疫性」を重視し、そのような自己に対する批判の契機を、「チャンスと脆弱さ」を持つからこそ、民主主義が「普遍化可能な唯一のもの」なのであると述べる (174)。民主主義は決して安全で盤石な政治体制ではない。それは常に危険に曝された「弱い」政治体制である。そしてその弱さ、その可塑性こそが、民主主義を普遍的な政体としうるのだとデリダは述べる。しかし同時に、民主主義がそのような多義的で、あらゆるものを受容しあらゆる事象を発生させるものであると認めるならば、同時に民主主義の下での人々の拡

散、そして様々な危険、特に専制や全体主義の可能性を常に心に留めておかなければならない。これからの民主主義は、近代が確立した主体や国家といった自己の境界を画定する概念の体系をどこまで危険に曝し、その限界を問いながら、どのように存在していくのか、それを終わりになく問い続けていくこととなるだろう。^{iv}

結び

*The Princess Casamassima*の結末には、民主主義に対するふたつの相反する態度を読み取ることができる。一つはハイアシンスの民主主義とその破壊的傾向に対する絶望である。彼は芸術への愛着から、階級制という不平等に立脚しつつその上に成立した文化を保持しうる貴族制へと回帰していく。もう一つはプリンセスの、民主主義への他者の留保のない参入の要求である。それは、近代民主主義が構築した主体や主権といった概念を揺るがし、主体の自己同一性や他者に対する優越を否定することでもある。このプリンセスによる要求は、むしろ民主主義自体の妥当性を問いに附するものではないだろうか。ハイアシンスの物語が彼の死により結末を迎える一方で、慟哭するプリンセスのその後は未決のまま残されている。彼女の際限のない情熱がはたして民主主義に包摂され得るものかどうかは分からないままである。むしろ、それは民主主義の名に依らない別の様態を要求するかもしれない。この、プリンセスの不可知のままに残された結末に、近代民主主義の内における彼女の表象の限界を見るだけでなく、その次の民主主義、民主主義それ自体への開かれを読みとるならば、このテキストは民主主義の限界を問いつつ民主主義に依拠しないその外にある可能性へと向かっていると考えることもできる。近代民主主義が拡大する時代にその限界を問い詰めたこのテキストは、同時にその先の民主主義、あるいは「来たるべき民主主義」の可塑性と普遍性の是非をも、問いに附しているのである。

註

- i 同時に、こうしたアメリカ人登場人物たちは、旧世界に対して侵略的な役割を持っていることも指摘できる。例えばニューマンはヨーロッパの美の象徴である旧家の夫人を結婚により文字通り獲得しようとしている。また、ミス・スタックポールの遠慮のない率直な態度は、ヨーロッパ化したアメリカ人であるラルフ・タチャットを少なからず困惑させる。
- ii この部分は、フーコーの権力論および生政治を想起させるものである。フーコーは「監獄の誕生」においてトクヴィルの監獄制度の報告を参照している。
- iii トクヴィルはその例として「結社」の結成や「形式」の尊重を挙げている。
- iv この部分で、デリダはカントの「統整的理念」との類似しつつも存在するわずかな差異を論じることで「来たるべき民主主義」を説明している。その差異とは、一つにはカントは「世界」という理念を統整的理念の内に存在するものとみなすのに対し、デリダは世界をある主体の内に留まるものではなく、より無限のものであるとみることである。ジェイムズについて言うならば、中期以降の作品、特に *The Sacred Fount* (1901) のように高度に審美的なテキストを見ると、よりカント的な方向へ向かっていったように考えられる。

引用文献

- Blair, Sara. *Henry James and the Writing of Race and Nation*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Clymer, Jeffory A. *America's Culture of Terrorism: Violence, Capitalism and the Written Word*. Chapel Hill; London: North Carolina UP, 2003.
- Crick, Bernard. *Democracy: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford UP, 2002. (バーナード・クリック 『デモクラシー』 添谷育志・金田耕一訳、岩波書店、2004年)
- Derrida, Jacques. *Voyous: Deux essais sur la raison*. Paris: Galilée, 2003. (ジャック・デリダ 『ならず者たち』 鵜飼哲・高橋哲哉訳、みすず書房、2009年)
- Foucault, Michel. *Surveiller et Punir: Naissance de la prison*. Paris: Gallimard, 1975. (ミシェル・フーコー 『監獄の誕生：監視と処罰』 田村俣訳、新潮社、1977年)
- James, Henry. *The American* (1877). London: Penguin Books, 1986.
- . *The Bostonians* (1886). New York: Random House, 2003.

---. *The Portrait of a Lady* (1881). Oxford: Oxford UP, 1998.

---. *The Princess Casamassima* (1886). London: Penguin Books, 1987.

Pateman, Carole. "The Fraternal Social Contract." *The Masculinity Studies Reader*. Ed. Rachel Adams and David Savran. Massachusetts: Blackwell, 2002. 119-34.

Tocqueville, Alexis de. *De la démocratie en Amérique*. Paris: Michel Lévy, 1835. (アレクシ・ド・トクヴィル 『アメリカのデモクラシー 第一巻 (上・下)・第二巻 (上・下)』 松本礼二訳、岩波書店、2005、2008年)

West, Rebecca. *Henry James*. London: Nisbet, 1916.

竹村和子 「<テロリストの身体>のその後—『カサマシマ公爵夫人』の終わり方」 『英語青年』 研究社、2006年9月号、337-40頁。